

西洋に於ける東洋の影響 (特に中古期に於ける) (上)

Der Einfluss des Morgenlands auf das Abendland.

(Vornehmlich während des Mittelalters)

ゲオルク・ヤコブ 著

文學士 宮崎市定 抄譯

古典教條の信徒は往々理想と現實とを混同してそれに基づき一の世界觀を立つるも、吾人の見を以てすれば、更に廣き見界に立てる批判に對して其の維持し難きものなるは明かなり。第一に吾人は文化の諸始源を創造せし偉大なる精神的作業を輕視するを常とするなり。

今日有史以前の新研究は吾人に教ふるに、地中海上最古の文化の潮流は南北に動かずして東西に動けるを以てす。高山大岳にて切斷されし北歐人と南歐人との交渉は比較的少く、兩者の宗教觀念は全く反對にて、ゲルマン人等は月を男、日を女

と考へ、希臘・羅馬人は日を男、月を女と考へしなり。その原始生活法、泳ぎ方、漕ぎ方乃至は農業牧畜みな全く異なる基礎に立てり。比較的新なる著作に於て猶、穀物耕作は最初羅馬人に依り或は中世に於て始めてガリア人に依りゲルマン人に來りしてふ説が述べらるゝ爲めゲルマニアは大麥以外如何なる穀物の種類をも羅馬より受け居らず、却つて反對に羅馬帝政時代既に其の伊太利の穀倉となり居たる事實を強調しても世人の耳の入り難き恨みあり。希臘・羅馬人の最初裸麥を知に至りしは北歐人よりし、ゲルマン人は更に其の

恩を東方に負ふ。吾人若し一たびアルプスを越えんか。動植物の全く異なる世界に入らんも、東の方は太平洋に至りてもさまでの變化を見ざるべし。人類も豈動植物と異らんや。實際諸民族間の親密なる文化關係は原始時代より存在し、北歐人の場合に於ては寧ろ東方と關係し、所謂地中海文化の影響は、時間的にも、空間的にも限られたるものなりき。先づバルト海と印度洋との沿岸住民間に存せし有史以前の交通は、印度洋、紅海、波斯灣に棲む貝の殻が屢々バルト海岸の古蹟に發見せらるゝにて證明するを得。中世に及びては更に其交通繁く、東方の古錢は瑞典、オルクネ島、アイスランドの北方にまで分布せり。

吾人一たび眼を故國の太古時代より轉じて數世紀を隔てゝ遠く現今時代に及ばんか。吾人は其創設者の希臘語を知らずしてアラマイク語を話せる東洋宗教中に生存し活動するなり。されば其の宗

教と比較すべきものを希臘文學中の例に於て求むるも無益にして、却つてデモト文學のバビルス中に求め得べきなり。既にかの心の貧しき者は幸なり、天國は彼等の物なればなり、てふ山上の垂訓は如何に努力するも、ヘレニズムとは附會し難き性質を有す。何人も直ちに感ずるが高く聳えたる吾人のドームは東方のモスクと密接なる關係あり、古典時代の建築は之と趣を異にし、屋根は一直線に空を劃し、單調なる柱列と相俟つて、神を容るゝ鳥籠の觀あり、希臘・羅馬の巫覡は血腥き犠牲もて神を祭れど、吾人の僧侶はユダヤに發せる聖書によりて祈禱を行ふ。教會堂の鐘は支那よりの借物にて、東方にては甚だ古く、多分紀元前二十世紀まで遡り得。祈禱の際も希臘人は貪欲にも神に對して兩手を擴ぐれど、吾人は印度風に合掌し、指を組むことなし。托鉢僧は印度の比丘より始まれり。今日と雖も猶、印度の世界觀はシヨ

ツペンハウエル等によりて盛に西方に注入さる。吾人の迷信の大部分はバビロニアの古代に遡り得。不吉の鴉は、人に忌まれし十三番目の閏月の象徴たりき。日曜の安息も實はバビロニアに起り、當時は土曜日が星の惡き日にて仕事を爲すに利あらずと考へしが翌日に延期されしまでにて、舊約聖書には安息日の動機が頗る文雅に造られ、今日英國の如きは、あらゆる方面に安息が勵行され居るが、その眞の起原が不幸なる日なりしこそ可笑しけれ。

吾人は東方にて案出せられし音符文字を用ゐ支那人の發明せし紙の上に書き、アラビア人に習ひし數字もて計算す。更に考ふれば印刷術は早く東亞に起り、遠洋航海に必要な磁針は先づ支那にて知られたり。傳書鳩は漸く十九世紀になりて歐洲に入れるが、東方にては十字軍以前に之を以て電報に代用せり。近頃までありし馬車は、車にの

せし支那の轎なり。戰爭に必須なる火藥は支那人の發明に係り、古き普魯西の狩獵法には東方要素を多く含む。彼の軍樂器、槍騎兵の旗、熊皮帽、鐘鼓、みな土耳其戰役の記念物たり。朝廷の儀式より日常の遊戲まで東方起原のもの至つて多し。中世に於て猶、木綿は本質的に「イスラム」的のものとして教會より排斥されしが、今日では世界を風靡せり。香料、珈琲、茶、砂糖其他の日常品も東方よりの贈物なり。吾人の公園が美しき東方の花にて飾らるゝ如く、吾人の語彙は多くの東方傳來語にて賑ふ。古代獨逸の帝衣にはアラビアの題詞が織り込まれ、國章と誇る双鷺も實は東方に由來せるものなり。

人類の文化進歩の重要なものとして音符文字が數へらる。古代獨逸のルーネ體文字は多分ボントスに於て布臘羅典字より發達し、一方羅典文字は伊太利に發達し、獨逸に入りてフリードリヒ二

世の朝廷にて獨逸文字となりたり。この單音文字は恐らくフェニキアよりでなくも何か非インド・ゲルマン族、多分前亞細亞のセム人により發明されそれが希臘の仲介にて諸方に傳播せしならむ。セム語とすれば容易に説明し得べき幾多の文字の名が之を裏書す。されど注意すべきはセム語にても猶説明されざる若干の文字あることにて、之が爲更に非セム語にその根原を尋ねざるべからず。兎に角、吾人の文化圈内に於て單音符文字の思想の發生せしは只一度に限られしなるべく、同様の思想が日本、ボルネオ、セレベス、アフリカ等に於て見らるゝに拘らず、歐洲人が少しも參與するを得ざりしは大いに注意すべきなり。最近に至りて此迄嘗て知られざりし文字の銘文が公刊されしが之によりて埃及の象形文字と、カナーンの單音符文字との中間物が豫想さるゝを得たり。或人の研究によればこの銘は西紀前五百年にしか遡ら

ず、その大部分は象形文字を認め得べく、されど餘程カナーン文字に近きものなりと。以前には吾人は文字と其音とは必ず相伴ひて借用さるべしと假定せしが、事實は、セム人は文字の形のみを借り來り、之にセム語の名稱の發頭音を表はさしめたるなりき。

之と比較すべき一事件は中世に於てアラビア數字が西方へ移入されたる事なり。この數字の如何に重要な意義を有するかは、希臘・羅馬の數字も對數表を引くことの全然不可能なること、機械學、天文學には一日も缺くべからざるを考へば思ひ半に過ぎん。されどアラビア數字の特質たる、零の概念及び其位置記法は印度に起れり。

歐洲に零の表はれしは十二世紀を最初とすれど八世紀のアラビア文書には已に之れ有り。一人のベヅウィン人が航海の遠征を呪へる詩に、再びこの足、震がぬ大地を踏みしめなば、直ちに我は脱

走せん、恐らく檢閲の目に我名の肩に○が附くるべし。と云へり。之は余一箇の考なるが、この抹殺記號は時には○時には●をなせど、これは零の發達史と大いに關係あり。ヘブライ語の舊約の原本は、削除せし文字を示すために其上に一つ宛點を打てり。古代の零は、今日アラビアの讀點に見る如く一の點にて表はされたるなり。

然らば○は先づ何處にて計算と關係するに至りしか。少くとも西紀前三・四世紀の印度數學書の斷片に於ては全く他の機能を有し、未知數を示すに用ゐらる。古代支那に於る○の痕跡は猶更確實を缺く。○を表はせる支那貨幣には甚だ古きもの多けれど、○は左迄古代に遡り得べしと思はれざれば、之は贋造の疑あり。一方零と位置記法とは已にコロンブスの發見以前のアメリカに於るマヤの曆の中に發見するに至れり。又印度人は○を虛又は空と名づけ、今日數 *Nil* の原語アラビア語

の *U* にはその翻譯なり。十六世紀に至り概念の分離が完成し、*Zero* が零を示し、*Nil* が個々の數を表はすことゝなれり。

アラビア數字はアラビア人の發明にあらず。アラビア文字が右より左に書かるゝに、その數字が左より右に書かるゝを以て知るべし。この數字はもと印度文化の圈内に生ぜり。印度數字がアラビアに傳播せし最古の資料は紀元八七三／四年の日附あるバベルスにて、當時の西方アラビアの數字は寧ろ、今日吾人が用ふる數字とも印度の數字とも甚だ相近きに、却つて近代の東方アラビア數字は著しく變化し居れり。十世紀の一古文書に表はれし數字は、古代形の東方形に變化する過渡を示すものなり。

人間の指の數が十なるよりして十進法計算は廣く行はるゝものなるが實は甚だ不便なるものなり。吾人は本來十二進法を用ひたるが、こは割算

の容易なると、其一因子たる三が數學上重要な數なることによりて、甚だ進歩したる方法と云ふべきなりしが、遂に近世になりて之を拋棄したることを思かなれ。有史以前の時代に於てはバビロン系統の強き影響の下に十二進法が維持され、今日猶、十二、六十の單位多く用ひられ、ダースの如き概念となりて残れり。バビロンの影響が十分此に確立されざりしは憾むべきの極みなり。

次に幾何に一瞥を與へんに、ピタゴラスの定理は、古代思想の最高點を示すものとして學校で御丁寧に教へ込まれる所なるが、最近の研究は、この所謂大ピタゴラスの定理は已に紀元前八世紀の印度に於て知られしを證明せり。アレキサンドリア數學の印度へ影響を及ぼしてふ假説は成立たずして、ピタゴラスの學問こそ、却つて東方より受けたる事を示す。吾人は序てとは言へ緊要ならざること又餘に深入したるが、かの輪廻説の印度

に發したるは疑ふべくもなく、西紀前八世紀頃既に彼の地に存したるを知るべく、埃及よりなどの影響には非るべし。

吾人は全人類を教育する爲め獨り世界人類主義を必要とする時代に生存するなり。古典派の學校理想は正に時代錯誤と言ふべし。到底十分に評價すべくもなき吾人の見界の尊ぶべき擴大、吾人の近代の世界觀の基礎付けの恢弘は、實に吾人が外國文化圈の精神に突入したるより生じたるものなり。此の精神は羅針盤の發明に依つて大洋の航海が可能なるに至りし後始めて吾人の見界に入り來りしものなり。學校の試験の爲めには此の發明者は表面上十四世紀の伊太利人フラビオ・ギョジャとなり居れど、十二世紀の終には已に磁針が西方に知られゐたるを如何せん。磁針は支那にては晩く見積るも十世紀には知られたり。十世紀以前の證據は信憑し難し。多分十三世紀頃よりと思はる

が、アラビア地方の航海者は、鍼力製の魚に磁力を與へ、皿に水を盛りて之を浮べ以て南北の方向を取らしめたりといふ。磁針の發明以前には鳥を飛ばして道案内とせり、その痕跡はノア傳説の外、日本、印度、ノルマンにも見出さる。且又支那人はコロンバスよりも遙か以前、確かには十一世紀後、多分八世紀後より磁針の偏差を知れり。

爆發藥は單に戰爭の方法を一變し、蠻力の代りに智的要素を主要と爲すに至りしものと思ふは誤りにて彼のアルプスの原始岩を切り開きて、民族融合に必要な墜道工事を成就する如き平和事業にも必要なりき。火藥は獨り希臘・羅馬人のみ發明し得べしと呑み込んで掛るは途方もなき謬妄なり。古代に於て戰爭に用ゐられし燃燒劑又かの希臘火の如きは爆發藥と何の關係もなし、アラビアのナファトウン即ち揮發石油を使用せるナフタ軍はアバツシド家の哈利發の軍隊に在つて既に早く

一の重要な役目を演じたりき。之も木造家屋の攻圍戰に火矢を發するまでなり。硝石と炭と硫黃とを含む眞の火藥の發明者はマルクス・グレクスといふ事になり居れど甚だ疑はしく、此人を九世紀にもつて行くからが抑も誤にて、吾人は今日に於て彼は實際一二五〇年頃それもアラビアの影響を受けて此の火藥を書けることを知るなり。聖バルバラの話も之に類す。曰く、彼女はアフリカに於るヴンダル侵入の際、豫め用意しおける自製の火藥を以て自ら爆發自殺したるが爲に砲兵隊の守護神となれりと。されど眞面目なる研究の結果は等しく火藥は先づ支那に於て早くも十二世紀の半頃に知られたりてふに一致す。こは元の太宗の汴京攻圍の際、金軍が勇敢に防禦せし記事の中に見出すを得。^(註一) 火藥の利用に係る礮石及び花火は、支那の火藥書中にある挿繪によりて比較的正確なる概念を得べし。十三世紀になりてアラビア人は之を

傳へたるが、硝石を支那の雪と呼び、花火を支那の矢とよべり。

更に重要な印刷術なり、今日印刷術が最大の文化要素と云ひ得べくんば、その理論の發明よりも實際の應用に重要な意義ありて存す。之には先づ安價なる印刷材料と、若干の字母にて如何なる文章をも表現し得べき音符文字組織との二條件が必要にして、之無くしてはさしもの技術も無用の長物たるを免れず。印刷術の要素に就て如何に東方人が參與するの多かりしかを見むとせん。印刷の概念は已に古代の印章指輪、貨幣鑄型に起原を見る。バビロン人が粘土に書けるは有名なるが、原文を複製するの要ある時は印刷とは全く類似の方法を取り、印章筒と稱する物を以て柔き粘土の上を廻轉せしめて銘を押し出す。されどこの材料は高價に過ぎて、此以上に發達する能はざりき。この技術は東亞に於て紙が發明され、材料間

題の解決せらるゝに及んで果然一大革命を來せり。

羊皮紙とパピルスは甚だ完全なる製造方法を必要とし且つ高價なるの憾あり。中央亞細亞は嘗て樺の樹皮を用ひ、南印度は棕櫚の葉に書く。今日支那人の用ふる毛筆は蒙恬の發明とされ居るが、余思ふに、此は竹簡の代りに絹が用ひらるゝに至りしと大いに關係あり。されど西紀百年の頃になりて始めて蔡倫は樹皮、麻、楮等より紙を製造する事を發明し、以て絹の高價なると、木簡の不便なるとを除くを得たり。紙は各種の植物纖維より得らる。其法先づ異成分を淘汰し、水中に攪拌してよく混和せしめ、斯て薄葉に乾し上ぐるなり。其古式の方法は著く毛氈製法と類似す。只此は動物質の、彼は植物質の原料を用ふるの差のみ。毛氈製造は東方トルコ遊牧人種が本場なれば、紙製造に至る刺戟は此方面より支那に入りしと推測

すも蓋し誤まらざるべし。殊に其最初の原料は動物質、乃ち絹屑なるに於てをや。世界に於て紙が發明されしは一回に止らずして、アメリカにてはマグワイ人に造られし事、當時のメキシコ繪畫により知るを得、ポリネシアのタバ族も又紙を造りしと云ふ。歐洲はかゝる文化の進歩を蔡倫の發明に感謝す。彼の發明の大なる效果は次第に世人の認むる所となり、一〇五年には（後漢）朝廷の命令により表彰するに至れり。

アラビアの著作家は吾人に報ずらく、羊皮紙、バビルスを驅逐せる、サマルカンドの紙工業は、其始め、サリの子ジャドが獲たる支那人の捕虜によりて此に移植されたりと。ジャドは此時敵の主軍たるトルコ侯と、支那皇帝が遣せる一高麗人に率ゐられし援軍とを大いにタラス河の畔にて撃破せるが、東西の記録は共に七五一年七月と月までもよく一致す。當時奴隸には自贖解放の道開かれ

ゐたれば、其身代金を支拂はしめんが爲に、彼等には屢々職業につくの機會與へられしが、若干の支那俘虜は此際紙工業を選べるなり。遂に斯してサマルカンドの永久の利益とはなりぬ。最近支那トルキスタンに於る發掘は吾人に古代の紙を與へ、猶之を顯微鏡下に檢すれば種々の重要な事實を發見すべし。スタインはタクラマカン砂漠にて七八二年、七八七年の日附ある紙を獲たるが、最古の物はコベルトがロストクにて得し三九九年の物なり。其成分は支那の植物、一種の蔞麻に、楮を少々混ぜたる物なるが、纖維の状態より推してすきかへしの紙ならんと云ふ。

千一夜物語で有名なる大臣ガファルの兄弟イブン・ヤジャは、コラツサンの知事たりし時サマルカンドの紙の事を聞き知り、七九四／五年之をバグダッドに移せり。この例に習ひて諸方の回教國は夫々紙工場を建設して以て西班牙に及べり。此頃

の紙の標本は諸國の博物館に多く見るを得可く、高價なるバビルス^{Babylus}を驅逐して販路を擴張し行ける徑路を示し居れり。

紙製造法は十二世紀にアラビアより羅馬に入り、十四世紀に獨逸に到着せり。之と共に紙に關係あるアラビア語多く歐洲に入れり。Parch^紙は紙の塊にして、Papi^紙は紙の包みを意味せしアラビア語より轉化す。紙が植物性を帶べる點が共通なればとて、數千年前の埃及語バビルスを宛て、Papi^紙となれるが實はバビルスとは全然別物なり。

紙と共に重要なるは印刷物の西方への傳播なり。惜むらくは支那に於ける此技術の起源に就て五人は未だ多く知るを得ず。世界人口の三分の一を占め、人類最古の文學を有し、猶經濟的には計り知るべからざる未來を有する此國の事情が少しも研究せられずして抛擲されある一方には、我獨逸に於てもサムニテ戰爭サビニ戰爭メツセン戰爭が恰

も歴史の精髓なるかの如く、得々として講述せらるゝ大學なきにしも非ず。ボルネオのダヤク族は着物の代用とも云ふべき文身を作るに、先づ木にて型をつくり繪具をぬりて皮膚に押し、その形に従て細工す。但し何時頃より始まりしも知られず。埃及の織布印染術は可也古く、其六世紀頃の標本は上埃及より發掘せられしが、之と共に存して二つの印染標本も發見されたり。カロリンガ朝時代にこの技術は西方に傳はりしと云ふ。印染術より印刷術への過渡はポリネシア人の工業が暗示す。彼等は楮の皮を楷きて紙に似たる物を製し、之に型を押して着物となす。惜むらくは此工業の始原の年代を知るを得ず。

紙の發明の結果、支那には紙上の印刷起れり。已に一七五年石經を大學門前に立てその拓本を取りし事あり。六世紀の終には木版印刷起り、隋の文帝の命により古典の遺書が上梓さる。^(註)此支那の

發明は甚だ古く東西兩方面に傳播せり。日本印刷術の起原に就て述んに、七六四年稱徳帝は佛寺に百萬の小塔を頒たしめ、其何れにも無垢淨光陀羅尼の印刷物を籠めおき給へり。その小塔の若干は日本大和の法隆寺に發見され今日猶見るを得べし。更に八一六年の日附ある金屬の印刷板には美事なる漢字彫られてあり。支那學者ヒルトは支那にて、一〇五四年の木版印刷物を買へるが、之には宋の一詩人の詩と共に其肖像が載せてありき。

喇嘛寺に甚だ古き印刷がありしと云ふものあれど如何にや。この古きチベット印刷物は其中に書かれし印刷者とか檀那とかの何者たるやが知られざるを以て其年代を確定する能はざるなり。ラウファは北京大覺寺の遼の碑銘中にて西藏印刷の年代に關して最古とせらるべき一〇六九年の記事を發見せり。曰く、一紳士は五十萬の銅錢を西藏聖典印刷等の爲に此寺に喜捨せり。聖典の標題内容

は知るに由なし。斯る事よりも九世紀頃には西藏に印刷術がありしかに思はる(註)。西藏の浩瀚なるカンチュルとタンチュルとは元の仁宗時代、西藏にて印刷されたり。其一信徒は蒙古にありし祭司たりしが、印刷に必要な多量の墨を送り寄して喇嘛を喜ばしめき。

トルキスタン發掘は九・十世紀と思はるゝ回紇の木版印刷を世に出したり。一三三〇年には回紇文の七曜經は一千部印刷されたり。アラビア語のものは埃及にて三十箇の印刷物發見されしが、皆十世紀の物にて、其二つは或は九世紀かも知れず。其形狀と印刷法とは全然支那と同一轍に出づと云ふ。第二十字軍の慘禍の爲、一一四七年北方シリアにて強制通用力を以て發行されし紙幣は金屬板印刷にして、一二九三年テブリツに設立されし紙幣工場は支那式に従へり。ラシド・エツデンも支那の印刷法を記せるが、面白きは當時支那にては、

一版に何部と印刷さるゝ事なくして、買手が来る毎に一部宛印刷して賣ることなり。今日吾人が猶屢々用ふる拓本術は印刷の先驅なり。一時に多數を印刷する事は印刷術の進歩を促すものなるが、支那の此古式の販賣法は遂に其事なくて止ましめたるかに見ゆ。

中世の交通状態を以てしては、紙が西方へ輸入せらるゝ間は決して安價なるものに非りき。獨逸に於ては十四世紀に入りて初めて紙の使用が一般化され來りしが、更にそれが西方に於ても製造さるゝや、支那アラビアに於るが如く印刷術が踵をついで起り來れり。

木版は支那にては已に一三三一年よりあり、歐洲にては一世紀後れて一四二三年に始まる、ポロニアの一獨逸人が早く一三九五年に木版術に通曉せしてふクリステラーの推測は猶疑ふべきの餘地あり。

木版印刷より活版印刷への進歩は、一般印刷術の發明に比すれば稍價値少きも、多大の便益を吾人に與へしは爭ふべからず、活版が木版より進化したしや否やは近年大いに論争されたり。吾人は木活字なるものに就て何等知る所なし。但し古代人が小學一年生に字を教へるために作りし、切り放し文字を作る型板は活版術の發見と何の關係もなし。所謂古典人の智慧は大抵この程度を出ざりしなり。然るに世の中には猶この古典人を尊崇するの餘り、獨逸人の勤勉が生める活版發明の功績をまでくさす者あり。曰く、美に鋭感なる古典人が鉛版印刷の醜さを我慢しなへしたらんには、如何なる庸工も活版位を發明するに至るは易々たりしならん。實は然らず、古典人の書籍に對する美感は遙に中世人の後にあり、古代希臘人の筆蹟は支那アラビアの夫と比較するに、夢にも優劣を爭ふ能はざるなり。兎に角活版印刷の二大條件たる

音符文字と紙とは古典古代の發明にあらず。活版の發明者グーテンベルヒを希臘の庸工と同一視するは酷なれど、又他人の桂冠を取りて彼に與ふるは却つて彼の眞の偉大を傷くるものなり。實に彼には先驅者ありき。和蘭人コステルが彼よりも以前に活版印刷を試みしは事實なるが如し。只コステルは活字の鑄造に際して、只一回の使用にしか耐えざる砂型を用ゐしが、グーテンベルクはその煩雜なる手數を除くに成功せるなり。

支那史料は粘土活字の發明者として畢昇を擧ぐこの技術が西方へ傳播せしや否やは確證なきが最近再び東亞に於て、グーテンベルヒよりも遙か以前に活字印刷による書物が存在せしこと明となれり。之が朝鮮の發明か、支那の發明かは未だ明かならざれど、兎に角活版印刷に於ても東方が西洋に先鞭をつけしことを證して餘りあり。朝鮮の活版印刷の起源は一三一七—二四年の間にあり。

その一四〇九年に印刷されし書の奥書によれば、時の朝鮮王は木版印刷の不便なるを知りて、文學保存のたるに印刷を起して銅活字を製造せしめ、その費用は臣下の力に藉らずして、自己宮中の内帑金より支出したりと。その日附は實に一四〇三年十二月十四日より翌年の一月十二日に至る。

この人類に最重要なりし發明もその故郷に於て容れられず、蓋し漢字の活字を鑄造するには甚だ強き材料を要するを以て不便なりしなり。さればさしもの新發明も十分にその效力を發揮するを得ず、吾人のセミチック音符文字を待つて始めて文化の一要素となるを得しなり。

（註一）支那の火薬につきては史林第二卷第三號第四號矢野仁

一氏支那に於ける近世火器の傳來に就いて、東洋學報第七卷、第八卷、石田幹之助氏、文永役に蒙古軍の使用せる。

「鐵砲」に就いて、同補遺、之によれば金人の用ひたるは硝石を含む火薬となすの證據薄弱なりといふ。

(註²) 歴史と地理第十六卷第四號、神田喜一郎氏、支那に於る印刷術の起源參照。之によれば、支那に於て印刷に關する確なる證據の最も古きは、唐文宗、太和九年馮宿の奏なりと。

(註³) こはラウファの誤にして、金石華編、卷百五十三、陽台山清水院(即ち大覺寺)創造藏經記に、

今優婆塞南陽鄧公從貴善根生得淨行日嚴咸雍四年(西紀

一〇六八)三月捨錢三十萬聳諸僧舍又五十萬募同志印大

藏經凡五百七十九帙

とあるを誤讀せしなり。